

お子さんの視力、育っていますか？ 早期発見が大切！子どもの弱視

ドクターズコンテンツシリーズ #49

はじめに

弱視とは、メガネをかけても視力が 1.0 に届かない状態です。

人の視力は生まれたときから育ち始め、8歳頃にほぼ完成すると考えられていて、この大切な期間に両目で物を鮮明に見ることが妨げられると弱視になります。

弱視は、脳の見る力の発達と密接な関係があり、3～4歳頃に治療を開始できるかがとても重要です。3歳児健診の視力検査は必ず受け、異常が見られたらすぐに眼科を受診しましょう。

視力の発達は 8 歳頃まで

脳の見る機能の感受性(視力を発達させる力)は、1歳半頃にピークを迎え、その後は徐々に衰退して8歳くらいまでに消失すると考えられています。この期間は、外からの視覚刺激を受けることで脳の神経回路が集中的に作られる時期で、感受性期間と言います。

良い刺激にも悪い刺激にも鋭敏に反応するため、視力の発達には大変重要な時期です。

弱視は鮮明な映像が脳に送られていない状態

感受性期間に、

- ① 両目で物を鮮明に見ること
- ② 網膜上にピントが合った鮮明な映像を投影すること
- ③ 映像を脳に正しく伝えること

の三つが正しく行われ続けていけば視力が発達し、8歳頃には正常な視力が確立されます。しかし、なんらかの原因により上記で挙げた三つの過程のうち、どれか一つでも妨げられると、脳に鮮明な映像が送られず、見る力が発達していきません。これが弱視と呼ばれる状態です。弱視は自然に治るものではなく、将来、運転免許の取得や職業の選択に影響を及ぼすこともあります。

弱視と診断されたら、すぐの治療が視力発達のカギ

弱視のなかには、不同視弱視や斜視弱視など、治療が遅れると効果が上がりにくいものもあります。3歳児健診で弱視が疑われた場合、または、家庭で弱視の兆候が見られた際にはできるだけ早く眼科を受診し、適切な治療を受けましょう。

8歳を過ぎても諦めずに治療を

弱視治療は8歳頃までに完了するのが望ましいとされていますが、10歳前後で治療を始めた場合でも治療効果が得られることがあります。まずは眼科を受診し、相談しましょう。



Doctor

ふなこし眼科
ペインクリニック

いしくら りょうこ
石倉 涼子 先生



3歳児健診の重要性

3歳児健診は、弱視を発見する大切な機会です。3歳児健診の視力検査は、まず家庭で一次検査と問診を行います。そして、なんらかの問題があった子どもに対し、保健師らが健診会場で二次検査を行うのが一般的です。

弱視の治療は、3～4歳くらいの視覚の感受性が高い時期に始められるかどうかで、予後が変わってきます。早期発見・早期治療のためにも、3歳児健診は必ず受けましょう。

iTICKET



家庭での視力検査は「片目を確実に隠す」が大切

一次検査を行う際、手で隠すと、よく見える方の目ですきまから覗いてしまい、異常を見逃すことがあります。できるだけ正しく検査をするために、片目を隠すときにはガーゼやティッシュペーパーなどを用いて、すきまから見えないように確実に隠しましょう。

すぐの受診が必要な場合

瞳が白く光って見える、目の大きさや形がおかしいなどの症状は、重篤な病気が潜むサインでもあります。このような症状がある場合は、3歳児健診の前であってもすぐに眼科を受診してください。

見逃さないで、子どもの弱視のサイン

乳幼児は、はっきり見える・見えないといった概念がなく、自分から見えづらさを訴えることはあまりありません。周りの大人が弱視のサインに気付いてあげることが大切です。

該当したら眼科へ

- ・見えにくそうにする
- ・よく物にぶつかる、転びやすい
- ・片目を隠すと嫌がる
- ・集中力がなく、落ち着きがない
- ・目つきがおかしい
- ・目が揺れる
- ・向かい合っても目が合わない

特に、軽度の弱視や片眼性の弱視では目の向きも普段の行動も問題ないように見えることが多く、異常を見逃されがちです。

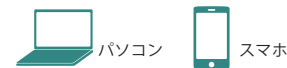
「遠くが見えるから大丈夫」と油断せず、日頃から子どもの行動をチェックしましょう。上記の一つでも該当する項目があれば、すぐに眼科を受診してください。

この他にも...

ドクターからの健康アドバイス「ドクターズコンテンツ」
サイトでは様々な症例をご紹介します。

- 視覚は「両目で鮮明に見る」ことで発達する
- 小さな子ども安心して受けられる、子ども向けの目の検査
など掲載中!

アイチケット広場



<http://park.paa.jp/>